

『オデュッセイア』第6歌〜第11歌の構造について

野津 寛

詩人「ホメーロス」の作として伝わる『オデュッセイア』は、主人公オデュッセウスが十年に渡るトロイア戦争の後、更に十年に渡る放浪と苦難の末、故郷イタケーへ帰還するという物語である。トロイア戦争に参加したその他の英雄たちも帰還した。メネラーオスにはメネラーオスの、ネストールにはネストールの帰還の物語があり、アガ멤ノンにはアガ멤ノンの帰還の物語があつた。帰還の物語であるというだけでは『オデュッセイア』は数ある帰還エピソードの中のひとつに過ぎない。オデュッセウスの帰還物語の内部から主人公オデュッセウス自身のアイデンティティーに着目するならば、『オデュッセイア』は英雄オデュッセウスが自分自身の失われたアイデンティティーを取り戻すという物語である。ここで英雄オデュッセウスの「失われたアイデンティティー」とは多様なものであ

る¹⁾。オデュッセウスは、ラーエルトースの息子としてのオデュッセウスであり、アウトリユコス（オデュッセウス）の孫としてのオデュッセウスであり、ペーネロペーの夫としてのオデュッセウスであり、テーレマコスの父親としてのオデュッセウスであり、イタケーの領主としてのオデュッセウスであり、女神アテナの寵愛を受けた英雄オデュッセウスであり、策略によってトロイアを征服した高名なオデュッセウスであり、競技と戦闘においても弁舌においても他者を凌駕するオデュッセウスであり、不死なる仙女たちを、少女ナウシカーやパイアケス人らを魅了し、彼らから愛情と親愛を獲得したオデュッセウスであつて、このように列挙して行けばきりが無い。『オデュッセイア』においてオデュッセウスが英雄不在の故郷イタケーへ帰還することは、イタケーが英雄を回復することでもあるし、英雄がイタケーを回

復することでもあるが、それは同時に英雄自身にとつては失われた諸々のアイデンティティーの回復であつたはずである。オデュッセウスのアイデンティティーが多様であつたように、回復されるべきアイデンティティーも多様であり、物語も自然と多種多様な要素を含むことになる。『オデュッセイア』とはオデュッセウスのこの多様なアイデンティティーが次々と想起され、回復され、実現され、再び英雄オデュッセウス自身の性質として確保されて行くプロセスである。

以前に私は「最初のヨーロッパとヨーロッパ人に関するノート」と題する論考を『言語文化』に寄稿したことがあつた。その論考の中で、『オデュッセイア』においてオデュッセウス像を構成する「主要な三要素」の重要性を強調した。この三要素によつてオデュッセウスこそが「最初のヨーロッパ人」である。(繰り返しになるが)そこで私が列挙した「主要な三要素」とは、第一に「嘆願」という制度の前提になつている「節度」と「調和」の思想であり、第二に「競技」という行為の前提になつている「自由」と「平等」の精神であり、第三に、弁舌によつてオデュッセウスが他者を欺くとしても、自分自身は他者によつて決して欺かれなれないという「懐疑」と「合理性」の知恵である。こうした三要素は、後に古典期ギリシアの文化的諸特徴(調和と節度の思想、平等と競争の原理、理性と言論に対する信頼)となり、近代ヨーロッパに古典古代の精神として継承されることになる。私見によれば、他ならぬ『オデュッセイア』によつて、

オデュッセウスのアイデンティティーの中に、これら三要素が統一的に表現されており、この本質的三要素の統一的な担い手であるがゆえ、『オデュッセイア』のオデュッセウスこそが「最初のヨーロッパ人」であるとすると(かなり大ざっぱな)議論を行つた。この点について詳細を知りたい方は、論考そのものをお読み頂きたい。

「最初のヨーロッパとヨーロッパ人に関するノート」は非常に広範な主題を扱う「ノート(覚書)」であり、諸々の主題の細部について詳しく論じることが出来る性質のものではなかつた。そのため『オデュッセイア』の具体的なテキストに則してオデュッセウスが上記三要素の統一的担い手として登場する場面の分析を詳しく行うことが出来なかつた。例えば、上記の三要素がオデュッセウスのアイデンティティーとしてお互いに密接に関連し合いながら現れるのは『オデュッセイア』第6歌から第8歌を中心とするバイアケス人のエピソードにおいてであるが、この個所で上記三要素がお互いに密接に関連し合つて現れるように見えるのは単なる偶然によるのか、あるいは「ホメロス」の名のもとに『オデュッセイア』の作者として了解される詩人の思想と語りの統一性によるものなのかといった基本的な問題について、ほとんど議論を行うことが出来なかつた。「最初のヨーロッパとヨーロッパ人に関するノート」はこのような欠落を持つていたと思われる。この欠落を本稿によつて幾らか補うことが出来たら幸いであると考ええる。

最初に、次のようなオデュッセウスの姿を想像しなければならぬ。オデュッセウスは、仲間も船も失い着衣に至るまであらゆる持ち物を失い、寒さをしのぐため裸に落葉をかけ、極度の疲労のためにひとり異国の河辺に眠っている⁴。外的な要素を全てそぎ落とされ、自分自身の身体と精神だけになったオデュッセウスがパイアケス人の島に漂着し、深い眠りに落ちてゐる。オデュッセウスのアイデンティティーを理解する上で、この場面ほど理想的な状況設定はありえないように思われる。

なぜなら、その時、オデュッセウスは自分自身の他に何も持っていない状態になっているからである。このまま放置され続けるならば、オデュッセウスの命はやがてその場で消滅していったことだろう。(女神アテナの導きにより)たまたま河辺に洗濯をしにやってきていたナウシカアーと侍女たちのかん高い叫び声によって目を覚ますと、オデュッセウスはその声が人間の声であるのかどうかその目で確かめるため、茂みから出て行くことになる。この時、オデュッセウスは単に裸体であったというだけではなく、少なくとも見掛け上は人間の住む世界から七年間も隔離された「野蛮人」である。葉のついた若枝によって辛うじて男の陰部を隠しつつ、茂みからナウシカアーたちに向かって這い出してゆくオデュッセウスの姿は、獲物に襲いかかるライオンに譬えられている。

「這い出て行くゆくその姿は、さながら山育ちの獅子のよ

う、己が力を恃んで自信に満ち、雨も風もものは、両眼は燃える火の如く、堂々として進む。牛や羊の群れに突入するかと思えば、山野に棲む鹿を逐い、胃の腑に攻められては家畜を狙って、堅固な屋敷へも入り込む―その獅子にも似て、オデュッセウスは切羽つまって今はやむなく、裸身をも顧みずに髪美しい娘たちの群れに入ろうとした」。

この光景はまさに「美女と野獣」である。不幸な運命によって野獣の姿に変えられた男が、婚期に達した勇氣ある善良な若い王女に助けられた後、高名な英雄という自分自身の正体を明かし、めでたくその王女を妻にするというストーリー展開。この『オデュッセイア』が内包するメルヘン的な可能性を詩人が意識していなかったという証拠はない。事実、オデュッセウスはアルキノオスの宮殿にいる間、第9歌に至るまで自分自身の婚者であるというアイデンティティーを誰にも明かさない⁷。この潜在的な別のストーリー展開の可能性が『オデュッセイア』の物語の進行に緊張感とサスペンスを与えている⁸。

獲物に襲いかかる恐るべき野獣に譬えられたオデュッセウスが、ナウシカアーに「嘆願」する。これは何と美しいアイロニーであることか。ここでオデュッセウスが行う「嘆願」は、身体接触を伴う通常の嘆願ではなく、純粹に言葉による嘆願である。その外見の如何に関わらず、この言葉そのものこそが、オ

デュッセスが完成された文明人であることを証明するに足りるものであり、後代の弁論家たちが競って手本にしたであろう内容と形式を備えている。

『オデュッセイア』の構造という面から観察するならば、オデュッセウスの嘆願はこれが最初ではない。オデュッセウスによる一連の嘆願は、彼がパイアケス人の島に上陸する以前から始まっており、嘆願は全部で三回行われていることが分かる。

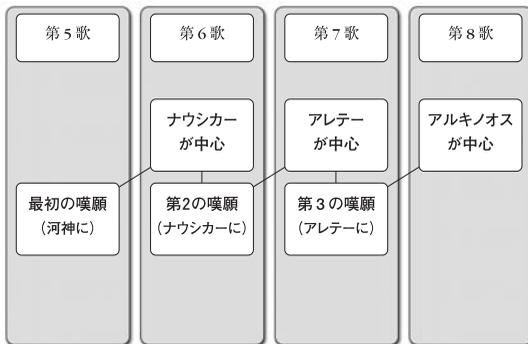
その第一回目は、河の神に対する嘆願である。荒波に揉まれつつパイアケス人の国に上陸する方法を探している時、オデュッセウスは名前も知らない河の河口を見つけ、その河の神に向かってこう言っている……

「お名前は存じませんが、神よ、お聞き下さい。ポセイドンのお咎めを避けつつ海上から逃れ、祈りに祈った甲斐あってようやくあなたの許へ辿り着きました。たとえば今のわたくしが、散々艱苦を嘗めた末、あなたの流れとお膝にすがって神助を乞うように、漂泊の人間が膝にすがってくれば、神々も無下にはなさらぬもの。どうか神よ、お憐れみ下さい。わたしはまぎれもなく、嘆願者としてあなたの許へ参ったのです。」⁹

それゆえ、ナウシカーに対する嘆願 (Od. 6, 148-185) は第二回目であり、第三回目がアルキノオス王のお妃アレテーに対する

嘆願であるということになる (Od. 7, 146-156)。

最初の嘆願がパイアケス人の島スクリエーへの上陸とナウシカーに対する嘆願を(嘆願の第二段階)、すなわちナウシカーを中心とする第6歌の内容を用意する(パイアケス人のエピソードの第一段階)。第二の嘆願であるナウシカーへの嘆願がアルキノオスの宮殿へのアクセスと、第三の嘆願であるアル



キノオスの妃アレテーへの嘆願(嘆願の第三段階)を、すなわちアレテーを中心とする第7歌の内容を準備する(パイアケス人のエピソードの第二段階)。このようにオデュッセウスによる一連の嘆願場面は、第三回目の嘆願によってオデュッセウスの当面の目的が、すなわちパイアケス人の王アルキノオスによって故郷イタケーへ送り届けてもらうという確約が成就されるよ

うに構造化されている。こうしてアレテーを中心とする第7歌はアルキノオスを中心とする第8歌を用意している。

このような三段階構造は、最初のヨーロッパ人オデュッセウスを構成する第二の要素として指摘した「競技」についても観察される。パイアケス人たちによる競技の場面(0d.8:104-255)は、デーモドコスの二つの歌の場面(0d.8:62-103; 8:256-380)の間に挿入されているが、第一にラオダマスの提案に対する反応であるオデュッセウスの最初の言葉(0d.8:152-157)、第二にエウリュアロスの挑発に対する反応であるオデュッセウスの第二の言葉(0d.8:165-185)、第三に円盤投げの競技に参加してこれまでのあらゆる記録を凌駕したオデュッセウスの言葉(0d.8:199-233)を較べると、この場面も三段階構造によって構成されていることが分かる。



第一段階におけるラーオダマスのどちらかというところな提案に対して、オデュッセウスは嘆願者であるという自分の身分を考慮して、競技への参加を辞退する。第二段階におけるエウリュアロスの意図的な侮辱を含んだ挑発に対して、オデュッセウスはエウリュアロスの無礼に対して憤りをあらわにする。そして最後の第三段階において、オデュッセウスは競技者・戦うギリシア人の英雄として自己のアイデンティティーを、明らかにする。

「トロイエの国に在って。われらアカイア勢が弓を引く時、わたしに勝ったのはひとりピロクテテスのみであった。彼を除けば、今この世に生きて飯を食っている人間の誰よりも、弓の腕前ではわたしが遥かにすぐれていると断言してもよい。」¹⁰

この場面のコンテキストにおいて「弓の腕前」に言及する必然性はない。パイアケス人の競技種目の中に弓の競技は見当たらない。「弓」はむしろオデュッセウスがイタケーに帰還した暁に求婚者たちを虐殺する武器である。この場面においても、三段階構造によってオデュッセウスのアイデンティティーのひとつが想起され、その所有が確認されていると言うことができる。これらと同じような三段階構造が、最初のヨーロッパ人オデュッセウスを構成する第三の要素に関しても指摘出来ないだ

ろうか。すなわち、オデュッセウスの弁舌という要素である。

しかし、第8歌の構造をざっと見る限り、ここで三段階構造を持つているのはオデュッセウスではなく、デーモドコスの歌であるように思われる。

先ごろ、一橋大学で開催された『オデュッセイア』に関するシンポジウムにおいても、『オデュッセイア』第8歌に含まれる所謂「デーモドコスの三つの歌」について議論が行われた。

シンポジウムの発表者とコメンテーターによって論じられた内容について、あるいはシンポジウムの問題設定そのものについて、ここで反論したり弁護したりする意図は全くない。ここで私が行いたいことは、所謂「デーモドコスの三つの歌」という「グループ化」をもう少し大きなコンテキストの中において捉え直すことである。特に所謂「第2番目の歌 (Od. 266-366)」と「第3番目の歌 (Od. 499-520)」について、『オデュッセイア』のより広範な関連性に照らして構造上の位置づけを明らかにすることである。

所謂「デーモドコスの最初の歌 (Od. 872-82)」が、所謂「第2番目の歌」と所謂「第3番目の歌」だけとセットになっているのかどうか、これら三つのデーモドコスの歌だけを一つのグループと見做し、独立させてよいのかどうか、という問題があるように思われる。この点に関連して、同じシンポジウムの席上において、すでにコメンテーターの大芝芳弘氏が正当な疑いを示しておられた。デーモドコスはアルキノオスの宴の最中

「何度も」歌っており、三回だけ歌ったとは限定できないことが大芝氏によって指摘されたのである。

別の観点からデーモドコスの三つの歌について考察するならば、以下のようなことにもなる。デーモドコスが「歌っている詩人」として「ミメーシス」により演劇的に登場するのは一回きりであり、それ以外は「歌った」と報告されているだけなのである。所謂「デーモドコスの最初の歌 (Od. 872-82)」はデーモドコスが「歌った」と報告されているだけであり¹¹、少なくともデーモドコスが「ミメーシス」によって演劇的に歌っている所謂「第2番目の歌」とは区別されるべきであるかもしれない。また、このデーモドコスの「最初の歌」は「第2の歌」に較べ余りに短い。

デーモドコスの所謂「デーモドコスの最初の歌」とそれ以外の「何度も」歌われた歌のグループ (cf. Od. 8. 90-92. 13. 27-29) と、所謂「第2番目の歌 (Od. 8. 266-366)」と「第3番目の歌 (Od. 8. 499-520)」のグループの間には大きな違いがある。すなわち、前者のグループはデーモドコスが任意の主題で歌い始めたものであるが、後者のグループはデーモドコスがそれぞれアルキノオスとオデュッセウスに命じられあるいは依頼されて歌ったものである。前者のグループの「歌」は、物語の中ではどちらかというと背景に属し、聴衆が注意をそこに集中すべき出来事であるとは見做されていない可能性が強い。そうだとすれば、「デーモドコスの歌」と名付けられ、何らかの構造的要

素と見做されるべき「歌」は、所謂「第2番目の歌 (Od. 8: 266-366)」と「第3番目の歌 (Od. 8: 499-520)」だけに限定されるべきであると言えるかもしれない。あるいは以下のようにも言える。所謂「第2の歌」と所謂「第3の歌」は所謂「最初の歌」と較べ、明らかに前面に押し出されている。

このように考えてくると、わざわざ依頼された上で歌われた「歌」は、パイアケス人の場面に関しては、デーモドコスによるものが二つ、別の登場人物によるものがひとつ、合計三つしかないことが気づかれることになる。その三つの歌とは、すなわちデーモドコスの「第2番目の歌 (Od. 8: 266-366)」と「第3番目の歌 (Od. 8: 499-520)」に加え、オデュッセウス自身がアルキノオオスの求めに応じて行う、第9歌から第12歌までを占める長大な、英雄自身の放浪物語である (Od. 9-12)¹²。敢えて言うならば、オデュッセウスは『オデュッセイア』においてデーモドコスを凌駕する詩人であり、『オデュッセイア』全体の六分の一を歌うことになる。デーモドコスの所謂「第2番目の歌 (Od. 8: 266-366)」と「第3番目の歌 (Od. 8: 499-520)」は、いわばこの長大な「歌」への準備段階として作られているとは考えられないだろうか。この三段構造を以下に図示してみたい。

こうして、最初のヨーロッパ人オデュッセウスを構成する第三の要素も、同じような三部構造によってそれ以外の三部構造とのパラレルな関係に並べられ、第5歌から第12歌まで続くオデュッセウスの人間世界への再インテグレートとリハビリテー



シヨンの物語の中に位置づけられることになる。こうして、イタケーへの帰還という「オデュッセイア」前半における究極的目的が、それぞれ三段階構造のステップによって行われる三要素の回復と同時に実現されるように構成されることが観察されることになる。

とここで、こうしたA—B—C三段階構造は『オデュッセイア』の前半部分において何度も用いられていることが分かる。例えば、いわゆる「テレマコス物語」におけるネストールの帰還物語とメネラーオスの帰還物語は、テレマコスのイタケー帰還のみならず、オデュッセウスの壮大な帰還物語を用意するものであると見做すことが出来るだろう。オデュッセウス自身の語りによる放浪の物語においても、キュクロプスのエピソードを中心にする第9歌ではキュクロプスのエピソードの前にキコーネスのエピソードとロートパゴイのエピソードが置かれているし、キルケーのエピソード

を中心とする第10歌ではキルケーのエピソードの前にアイオロスの島のエピソードとライストリユゴネス族のエピソードが置かれている。バラレルを指摘して行けば、他に単純なものも複合的なものもあるが、ここでは網羅的である必要はないだろう。最初に提示した「三要素が互いに密接に関連し合って現れるように見えるのは単なる偶然によるのか、あるいはホメーロスの名のもとに『オデュッセイア』の作者として了解される詩人の思想と語りの統一性によるものなのか」という問題に対する答えは以上に述べた通りである。以上に述べた通り、オデュッセウスのアイデンティティーが想起され、回復され、実現され、再び英雄オデュッセウス自身の性質として確保されて行くというプロセスの中で、三要素が統一的な語りの方法で提示されているのである。

- 1 本稿では特に『オデュッセイア』の前半部分(Od. 1-13. 35)を考察の対象としているが、オデュッセウスの帰還が求婚者たちに対する復讐によって成就するという意味では、『オデュッセイア』全体が帰還物語とみなされよう。
- 2 『オデュッセイア』第1歌の冒頭(Od. 1.1)でオデュッセウスは *polytropos* と呼ばれている。この形容詞は日本語訳(岩波文庫、松平千秋訳)では「機略縦横なる」となっている。

文字通り、とらえ所のない、非常に訳しにくい形容詞である。オデュッセウスが様々な方向にさ迷ったこと、持ち前の巧妙さにより機転がきくこと、様々なひねりを持つていること等を意味していると考えることが可能である。

- 3 明治学院大学言語文化研究所『言語文化』第十八号(二〇〇一年)、p.99-123.
- 4 *Od.* 5.474-493.
- 5 カリュプソーは人間ではない。
- 6 *Od.* 6.130-136(岩波文庫、松平千秋訳)。
- 7 オデュッセウスが身につけている着物に見覚えのあるアレテーが「客人よ、わたしが第一にお訊ねたいのは、そなたがいかなるお人で、どこからおいになったか、またその着物は何者がそなたにあげたのか、ということ。」(*Od.* 7.226-239、岩波文庫、松平千秋訳)と尋ねているが、明らかにオデュッセウスはアレテーの質問の前半部分に関して意図的に「はぐらかし」をしているかのように描写されている(*cf.* 7.240-297, *ibid.*)。
- 8 オデュッセウスの正体が知られていない限り、ナウシカー自身の「このような殿方がこの国に住みついて、わたしの夫と呼ばれたらどんなによいことだろう。」(*Od.* 244b-c)、岩波文庫、松平千秋訳」という発言も、アルキノオスの「そなたのような立派な男が、——それに考えもなしと同じのそなたが、この地に留まってわしの娘を妻にし、わしの婿と呼ばれるようになったらどんなによいだろう。」(*Od.* 6.311-313, *ibid.*)」

- とらう発言も、それほど非現実的なものではない。
9 *Od.* 5. 445-450 (岩波文庫、松平千秋訳)。
10 *Od.* 8. 215-222 (岩波文庫、松平千秋訳)。
11 A. F. Garvie の註釈付テキスト *Odyssey, books VI-VIII* (Cambridge U. P. 1994) の中で、デーモドロスの問題の歌を
12 “Demodocus’s first song” と呼びながら、 “is presented briefly and entirely in reported speech” としている。
け中断されているが、その中断についてはここでは考慮しない (cf. *Od.* 11. 333-377)。